（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	藤野 志織
論文題目	アンドレ・ブルトンの生きた「ドキュメント」の特異性 —最晩年における自動記述の再提起を手がかりとして		

（論文内容の要旨）

本論文は、アンドレ・ブルトン (1896-1966) が作品を語るときに用いる「ドキュメント」という表現の概念化を試みながら、従来語られてこなかった1930年代から60年代にかけての自動記述概念の深化を、「シュルレアリスム遊戯」を補助線として明らかにすることを目的としている。

序論では、文学におけるドキュメントについて論じる意義が、先行研究を整理しながら明らかにされている。フランスの文学研究においては、歴史研究者アネット・ヴィヴィオルカが2002年に出版した『証言者の時代』を契機として、ドキュメントについての議論が活発におこなわれるようになった。歴史学の側に目を向けても、イヴァン・ジャブロンカが2014年に『歴史は現代文学である』という著作を発表し、歴史を語るときにあえてフィクションの手法を用いることについての議論がおこなわれるようになり、歴史学と文学を横断する研究が待たれている。このようなドキュメント研究の高まりの中で、ドキュメントと密接な関係をもつシュルレアリスムについても研究はなされている。しかしながら、それらの先行研究は、おもにシュルレアリスム運動初期の活動記録に向けられたものであり、本論文がとりあげるブルトン自身が述べる「ドキュメント」に対しては本格的な研究はおこなわれてこなかった。これに対し申請者は、とりわけ自動記述が直接的な形で表に現れてこなくなった1930年代以降のブルトンのテクストにおいて、客観的な資料としてのドキュメントとは異なる、ブルトン独自の「ドキュメント」概念が見てとれることを指摘し、この概念に対する有効なアプローチを検討した。

まず第1章においては、ブルトンの「ドキュメント」概念が、20世紀前半のフランス文学の文脈に位置づけられている。ブルトンが牽引したシュルレアリスム運動は、一般的には19世紀のレアリスムや自然主義を否定するものとされる。これに対し、申請者は、ブルトンの「ドキュメント」概念を検証することにより、ブルトンが、エミール・ゾラが「科学の時代の文学は真実を語るべきだ」として自然主義文学を打ち立てた流れを批判的に継承したという見方を可能にした。これは、ドキュメント文学の源流を確定する上で重要な指摘である。ただしゾラと大きく異なるのは、ブルトンの「ドキュメント」が、外的な出来事ではなく内面を映じるものだという点である。申請者は、内面の記録としての「ドキュメント」概念のブルトンにおける特異性を、同時代の作家ミシェル・レリスの自伝的テクストとの比較によって明らかにしている。

つづく第2章では、シュルレアリスム運動初期の記録としてのドキュメントとブルトンの「ドキュメント」概念の差異を明確にするため、写真とテクストによって構成された『ナジャ』を分析対象としながら、写真による「ドキュメント」とテクストによる「ドキュメント」の違いが論じられている。ここで明らかにされているのは、自動記述において書きながらイメージの

到来を待つという持続する時間が問題となっていたのと同じように、テクストによる「ドキュメント」が、瞬間の記録である写真とは異なり、持続性を前提としていることである。この持続性は、時間性を伴う関係を写し取ることができるという点において、ブルトンが「ドキュメント」に求めた自己探求を可能にするものである。申請者は、ここから『ナジャ』というテクストの客観性について考察し、この作品が、ブルトンが客観性から主観性に重点を移す分岐点として位置づけられることを論じた。

第3章では、ブルトンの「ドキュメント」概念の変容がどのようなものであったかが、第2章で抽出した客観性から主観性への移行という視点から明らかにされている。主な分析の対象となっているのは、1920年の作品『磁場』の「蝕」の草稿に対する加筆および1963年に発表された『ナジャ』の全面改訂版における改変である。これらの分析から明らかにされたのは、先行研究においては1930年頃を境に途絶えていたとされる自動記述実践が、「客観的偶然」や「シュルレアリスム遊戯」のなかで脈々と受け継がれていた事実である。さらに、「ひまわり」という自動記述の詩の記憶による再現を扱いながら、ブルトンの「ドキュメント」が、作者が必要なときに参照する「資料」ではなく、作者に付きまとい、不意に襲いかかる主体性を持つことで、思考を媒介するものとして機能していたことが論証された。

第4章では、「ドキュメント」概念と、自動記述の試みの背景となっていた「声」との関係が、『シュルレアリスム宣言』（1924）と『ラの音』（1961）の比較、次に『ラの音』と＜互いのなかに＞という名の「シュルレアリスム遊戯」との比較を通じて明らかにされる。『シュルレアリスム宣言』においては、書く主体とは無関係な「声」の到来が重視されていた。これに対し、『ラの音』では、それら複数の「声」をつなぐテクストが加えられていた。さらに「シュルレアリスム遊戯」においては、オートマティックな「声」が任意に与えられた要素をつないでいると解釈できる箇所がある。ここから申請者が導き出すのは、最晩年のブルトンの芸術的営為において、「声」は、加工しなければ文学テクストとして成立しないものではなく、テクストをテクストたらしめるものへと変容していくという結論であり、これこそが持続的かつ主体的な「ドキュメント」という概念を胚胎するという洞察である。

結論では、以上の議論を受け、ブルトンの「ドキュメント」の特異性として次の4つが提出される。すなわち、内面を映じるという意味での「主観性」、瞬間ではなく時間の流れを写しとるという意味での「持続性」、書かれた後も書き手に作用し続けるという意味での「主体性」、絶えざる書き換えを許す「更新性」である。このような考察を通し、本論文は、ブルトンの「ドキュメント」が作品という形での固定を拒むブルトンの「思考」そのものであることを明らかにしている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、アンドレ・ブルトンの作品を「ドキュメント」という独自の視点から読み解くことにより、自動記述が直接的な形で表に現れてこなかった 1930 年代から 60 年代のあいだにどのような形で深化していったのかを明らかにするものである。

自動記述については、すでに先行研究において、それがオートマティスムという「原理」によってテクストという「成果」を生みだす際の、具体的な「実践」とする見方が提起されていた。しかしながら、この区分における「実践」のもつ特殊性については、これまで議論が尽くされてきたとは言えない。申請者の研究が独創的なのは、法則として定式化される「原理」とも、作品として閲覧可能な「成果」とも異なる「実践」に着目した点にある。また、再版に際してブルトンが唯一手を加えた『ナジャ』に注目し、ブルトンにおける自動記述概念の変容と「シュルレアリスム遊戯」とのこれまで分析されてこなかった関係を指摘した点も高く評価できる。「ドキュメント」という表現は、先行研究において無視されてきたわけではないが、ブルトンにとっての「ドキュメント」という語がもつ射程は、これまで明確に考察されてこなかった。本論文の特徴は、この「ドキュメント」という言葉を掘り下げ、それがブルトンの芸術的営為全体の構成理論となっているという斬新な見方を提出したことにある。

ドキュメントという語は、通常は、なんらかの出来事についての固定された客観的記録を指す。文学について用いられる場合には、作家が準備段階に参照するものを指すのが普通だが、ブルトンの「ドキュメント」は、客観的な記録というより内面の記録であるとともに、作品を裏打ちするものではなくそれ自体が提示される。また、「シュルレアリスム遊戯」において自動記述の集団実践をおこなった際に体験された、異なる声が交錯する「場」としての特性を引き継ぎ、ある種の複数性を備えている。本論文は、このように多面的で既存の文学テクストと異なる特徴をもつブルトンの「ドキュメント」概念を、複数のアプローチによって浮き彫りにした点が高く評価できる。

まず第1章では、ブルトンの「ドキュメント」が、19世紀の作家と同時代の作家それぞれとの比較により、文学史における反「文学」の系譜に位置づけられる。とりわけ、文学的な立場が相反すると目されるブルトンと自然主義作家エミール・ゾラとを連続的に捉えることを可能にした点は、20世紀文学におけるドキュメントのもつ意味を考えるうえで重要な意義がある。

つづく第2章では、実際のテクストの改訂と「ドキュメント」についてのブルトンの考えがどのように連関しているかが示される。『ナジャ』を客観的なドキュメントから脱却し、主観性と交差する「ドキュメント」へ向かう過渡期の作品として位置づけた点に、本論文の独自性を見いだすことができる。

第3章は、『磁場』の「蝕」の草稿への加筆や「シュルレアリスム遊戯」を題材として、ブルトンの「ドキュメント」が思考の媒体となっていることが明らかにされる。これを可能にするのは、申請者の分析によれば、「ドキュメント」の主体性である。つまり本論文は、

人間が主体となって資料を活用するのではなく、「ドキュメント」の側が主体として、人間に更新を要求してくることを示している。これは、「ドキュメント」に主観性を導入したことによる主観性と客観性のバランスの崩れに対するある種の逃走線として、今後の文学におけるドキュメント研究に寄与する視点である。

最後に第4章では、自動記述が表に出てこなかった30年間のブルトンの変容を追うため、1924年の『シュルレアリスム宣言』と1961年の『ラの音』における「声」の役割の変化が分析される。そこで明らかにされるのは、「シュルレアリスム遊戯」の実践が「声」自体に主体的な役割を担わせたということである。第3章において抽出したドキュメントの主体性が、テクストにおける「声」の役割の変化という形で見てとれることを論証した点に本論文の独自性がある。

以上のように、多様なテクストや実践を追いながらブルトンの「ドキュメント」の特徴を抽出し、それがブルトンの作品構成の論理ともなっていることを示した本論文は、シュルレアリスム研究にあらたな視点をもたらすことを可能にする重要な提起をしている点で高く評価できる。完成した「芸術品」とも探究の単なる「記録」とも様相を異にするシュルレアリスム作品をどのように扱うかについては、これまで研究者のあいだでも明確な考えが打ち立てられていなかった。本論文は、その中間に位置づけることのできる「ドキュメント」概念を提出することによって、シュルレアリスム研究のみならず20世紀フランス文学の研究にあらたな方法論を提示した点で優れていると判断される。

ただし、本論文には、概念整理をより精緻にしなければならない箇所も見られる。また、本論文で明らかにされた「ドキュメント」の概念が示すテクストがどのようなものであるかについての検討は、充分になされたとは言えない。テクスト分析については、先行研究にたよりすぎている部分も見受けられ、本論文で明らかにした概念をもとに詳細なテクスト分析が今後おこなわれることが期待される。

しかしながら、概念化には必ずしも馴染まないために詳細な先行研究のなかった「ドキュメント」というテーマに取り組み、その特徴を抽出した本論文の学術的意義は大きい。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年7月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降